中央道諏訪南インターチェンジ県道取付用地内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書

昭和54年度

（御射山南遺跡）

富士見町教育委員会

中央道諏訪南インターチェンジ県道取付用地内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書　　昭和54年度

1. 発掘調査の動機

本報告に関る発掘調査は、首題に掲げた如く、中央道の諏訪南インターチェンジ建設にあたり、インターチェンジと県道の取付けによって埋蔵文化財の包蔵地である御射山南遺跡の一部が破壊されるので、事前に発掘調査して記録保存する事業である。

発掘調査は、長野県より委託を受け富士見町教育委員会が調査団を編成して実施した。調査団は、富士見町教育委員会の武藤雄大が担当し、前年に実施された中央道遺跡調査の事実上の延長である、という調査の性格から、調査員及び発掘人夫等も、その主旨にそって依頼選定した。

2. 遺跡の立地及び環境

御射山南遺跡は、諏訪大社上社の上の御射山と呼ばれる御射山社の境内の下方に位置し、つい最近まで赤松を主体

とする山林であった。

このあたりは、八ヶ岳火山列の噴出活動によって形成された泥流堆積物を主体とする基盤の上に上・中・下部の三段階のローム層が堆積した扇状地状の地形となっている。

遺跡は、こうした扇状地状を示す掘野を手洗沢が南を唐渡沢川が北を開折して出来た帯状の台地を占め、なかでも台地がわずかに削り取られた周辺が濃厚な分布を示し、他は極めて稀薄である。また、現河床面からの比高差も大きく20m以上であって遺跡の立地としては好条件とは言えない。

遺跡の性格は、縄文時代早期・中期・後期の遺物散布地であり、又、それぞれの時期の耕地としても有力であったようである。

8. 発掘調査の経過

調査は、昭和54年7月17日から26日までの12日間を要した。そのうち、17日は第2図に示した通り、B区を主体にして、A・B 53から79までの208 m^2、L・M 54から79までの208 m^2および、62・63のA～P＋A区のW～Yまでの120 m^2、74・75のA～M＋A区のV～Yまでの104 m^2、総計640 m^2にわたり4×4mの発掘グリッド40を設定した。

グリッド設定に先立ち全面にわたって草刈りを行った後に、前年の調査グリッドとの調整のための測量を実施して杭打ちに移った。

引続いて18日～20日までの3日間を要して設定した発掘区域内の表土剝ぎを行う。表土剝ぎは、バックホーを使用した。まず、小木および草根の多い地表下30 cmを剝ぎ取り、引続いて松根など大木の根掘りを遺構や遺物を破損しないように極めて慎重を期しつつ実施した。その結果、表土剝ぎには重機代が余分にかかったが後続する手掘りの調査が極めて順調に短期間のうちに終らせることが出来た。

手掘り調査は、23日から27日まで実施し、黒色土層までの調査を13.5グリッド、ローム面までの精査を26.5グリッド実施することができた。

しかし、費用の関係からロームマウンドの一部が完掘できなかった。

4. 遺 構

発掘によって発見した遺構は、ロームマウンド8基だけであった。

No. 1マウンドは縁石を伴う最も典型的で大形であった。第3図(イ)の右上・第4図左下、中央のマウンドは逆三角形を示し、下部程ど粒子が荒く上部はさらさらしていた。周辺の貫入黒色土はマウンドを支える如く貫入し腐植度合が高かった。明らかに典型的な堆肥製造土坑である。No. 1マウンドに付属する小マウンド状の凹みは、ローム中に腐植が混入し、かつ、凹みの底部に小穴が存在して大樹の倒伏による産物であることが明確であった。このようなマウンド状凹みは調査区域内に多数存在したが、遺構ではないので記録しなかった。第4図左上

No. 2マウンド　マウンドのロームがやや変形し、再利用の状態が良く判別できた。

No. 3・4マウンド　いずれも土壙に対しマウンドが少さくNo 2マムンドと同じく再利用マウンドであった。

No. 5マウンド　これは小形であり土壙の凹みがゆるく小穴こそ存在しなかったが、ことによると大樹の倒伏穴かもしれない。

No. 6マウンド　全貌を知り得なかったが、再利用マウンドであることは確かであった。

No. 7・8マウンド　重複するマウンドで類例は少ない。No 7が古くNo 8が新しい。点列の部分は掘出し口であろう。

焼土址　焼土址は1個所あった。径30 cm厚さ3～5 cmの円形でローム面上5～10 cmの褐色移行層中に存在し早期に属することが判明した。周辺に石はなく草根類を焼却した痕跡であろう。

粘土塊　粘土塊はロームを掘凹めた小穴中に遺存していた。この粘土塊は中央部は変っていなかったが、周辺部はローム中の鉄分が沈着し褐鉄鉱化が進んでいた。早期の産物であろう。

断層　断層はすでに昨年の調査で判明していたので、その追究は簡単であった。

ほぼ南北に延び用地境付近で消滅していた。したがって南程段差が大きく30～40 cmに達し摩差巾も大きかった。

この断層は、泥流堆積物の上面が南方に向って摩れたために発生したもので、その規模と範囲は極めて小さく、最大摩差は1～2 m程度であったことが地層調査の結果判明した。

5. 遺　物

発見した遺物は総計50点であった。そのうち土器は31点、石器は原石を含め19点となっている。

31点の土器の内訳は、早期7点・中期4点・後期20点の割合である。それから後期の土器はほぼ万辺なく発見され、早期は比較的集中し、中期のそれは1個所に集中していた。

31点の土器のなかから主なもの12点を摘出して若干の考察を加えてみることにしよう。

早期の土器は4点が撚糸文で3点が無文であった。撚糸文の施文された土器は、いずれも胴部または下胴部の破片で黄褐色～赤褐色を呈し焼成は良好であった。無文の土器は、茶褐色を呈し底部に近い破片である。これらの土器は早期でも前半に属し押型文土器に先行するものであろう。第6図左列

中期の土器は3点を図示した。内、418は櫛形文土器の下胴部であり、他の2点は深鉢の胴部の破片で、いずれも井戸尻Ⅰ式期の土器である。第6図中列

後期の土器は褐黒色を呈し、結縄文などの施文のある破片は研磨されたものが多く口縁部の破片である。しかし、その主体を占める素文の破片は研磨されず胴部または下胴部の破片であった。これらは、いずれも後期初頭の堀ノ内Ⅱ式土器であった。第6図右列

石器は19点の内から8点を摘出して図示した。449は黒曜石の石核石器である。早期の穂摘具であろう。400は頁岩製の諸刃型石器で撮みがあり、石匕に相当する形態を呈すが、石匕とは異り直行する柄を付けた利器か、それとも投槍状の狩猟具なのか判然としない。後期に所属するものであろう。410は玄武岩製の石匕で早期の除草具であろう。404は輝石安岩製の凹石で片面に凹みのある中期の石器である。408・412・444の3点は輝石安山岩製の磨石で、444以外は片面だけが磨面となっている。406は輝石安山岩製の平板状石臼である。この石器には408・412

などの磨石がセットされて石臼となり早期の調整具である。

6. 結　語

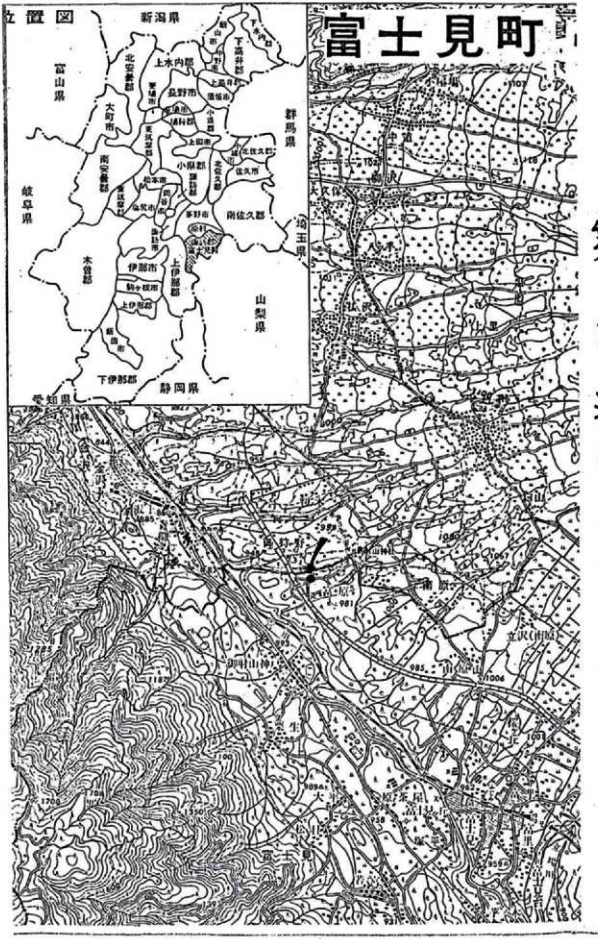
今年度の調査は、発掘主体が変っても遺跡は同じ御射山南遺跡を調査したのであって、昨年度に引続いた一連のものである。したがって本来、その報告書も分離して作成すること自体不自然である。しかし、契約による経費の出所が異るため不本意ながら一応報告書として纏めることにしたのである。

したがって詳細な部分については、新たな機会を得て報告することにしたい。

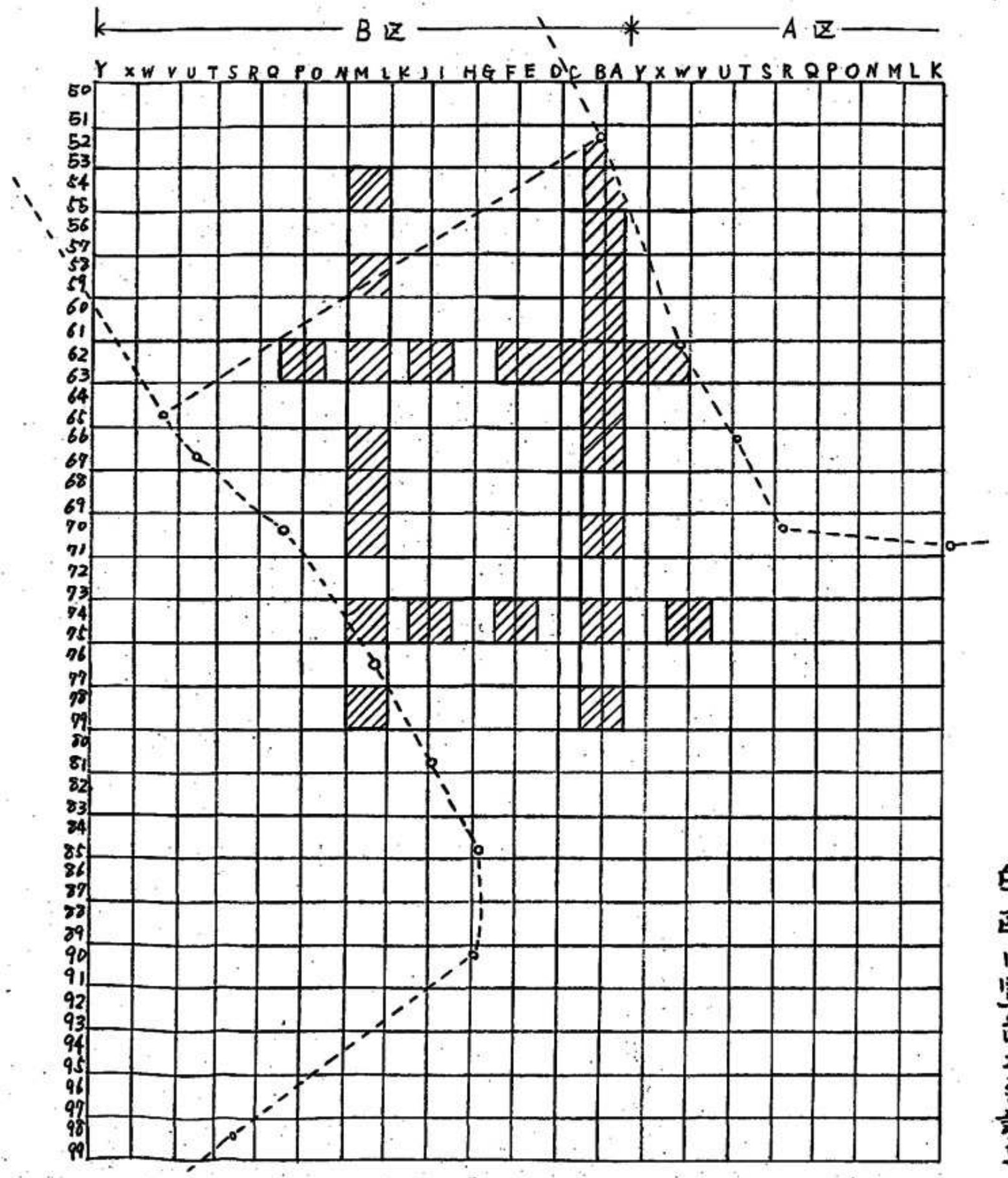
付　　図

1. 地形図　1：50.000
2. 発掘区の設定図
3. 遺構と遺物発見地点3葉
4. 遺構と発掘風景
5. 石器実測図
6. 土器拓本

1表　遺物台帳


位置図
富士見町
新潟県
富山県
岐阜県
愛知県
群馬県
埼玉県
山梨県
静岡県
北安曇郡
大町市
上水内郡
長野市
上高井郡
下高井郡
小県郡
上田市
佐久市
南佐久郡
諏訪郡
松本市
塩尻市
南安曇郡
東筑摩郡
木曽郡
伊那市
飯田市
上伊那郡
下伊那郡
上伊那郡
中道
大久保
弘沢
立沢
浦原
生

第1図 遺跡の位置



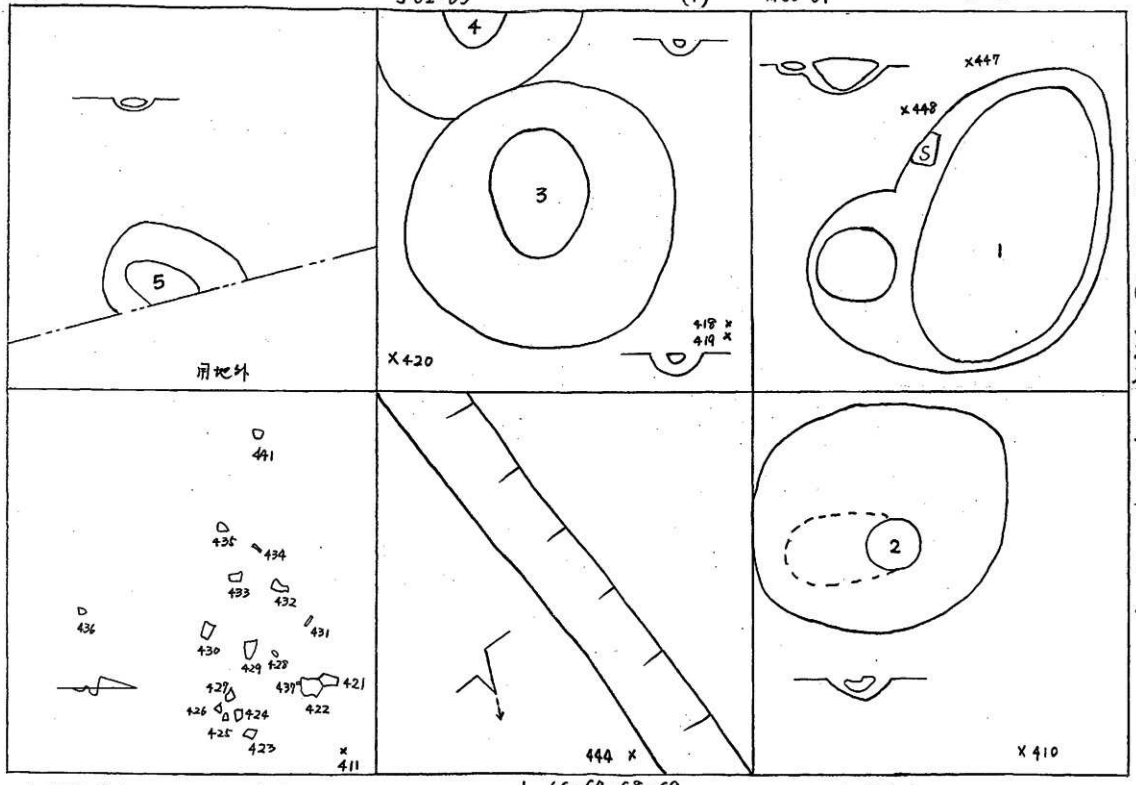
第2図　発掘区の設定図

斜線＝ローム面まで精査
白区＝黒色土まで調査

A55·56
B55·56 グリット　ロームマウンド(5)

I 62·63
J 62·63 グリット　ロームマウンド(3)(4)

L58·59
M58·59 グリット　ロームマウンド(1)



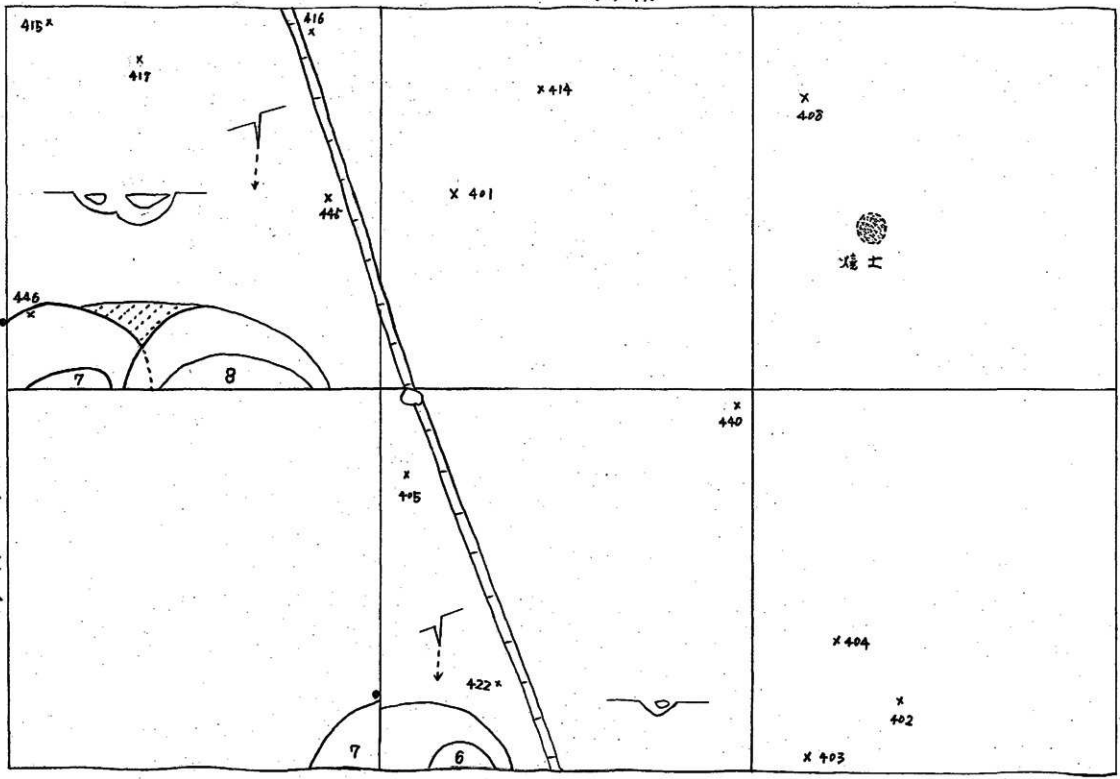
第3図(1) 遺構と遺物発見地点

L·M63グリットにおける土器出土状態

L 66·67·68·69
M 66·67·68·69 グリット　ロームマウンド(2)
断面線

第3図(1) 遺構と遺物発見地点

A 60～65
B 60～65 グリット ローム マウンド(7)(8)
断面線

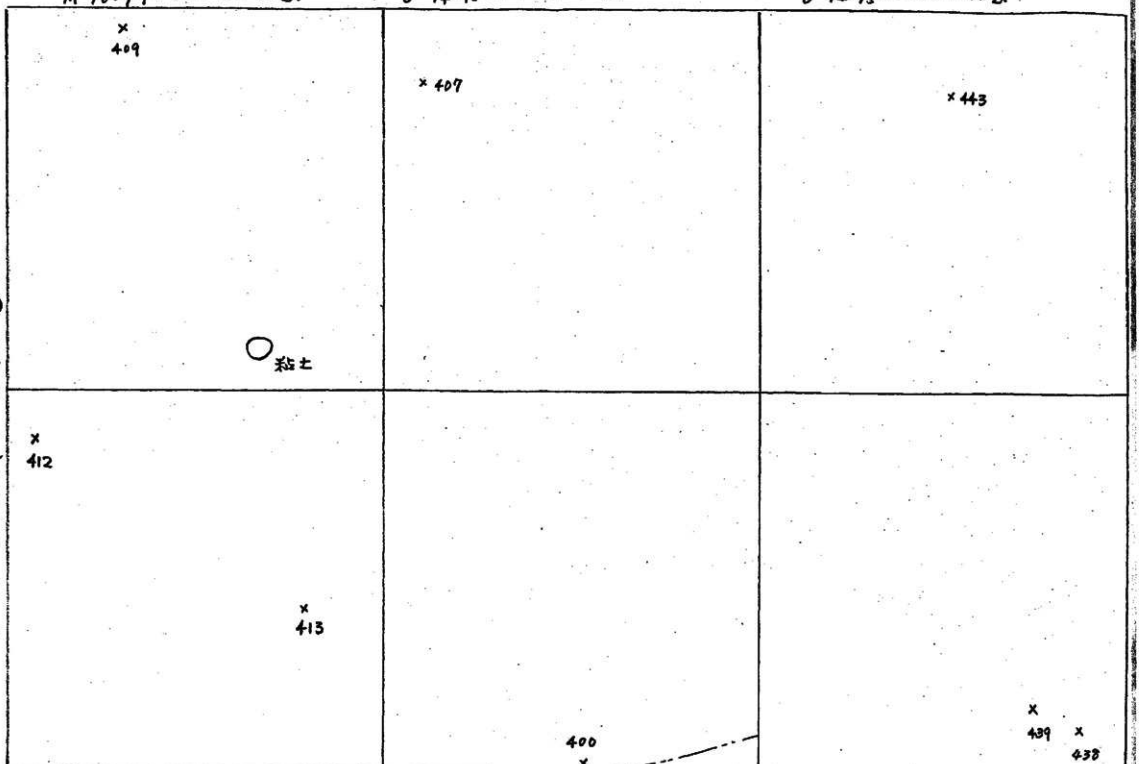


A 66・67
B 66・67 グリット ローム マウンド(7)

X 62・63
A区 Y 62・63 グリット ローム マウンド(6)
断面線

A 70・71
B 70・71 グリット 土壙墓

第3図(ハ) 遺構と遺物発見地点



発掘風景

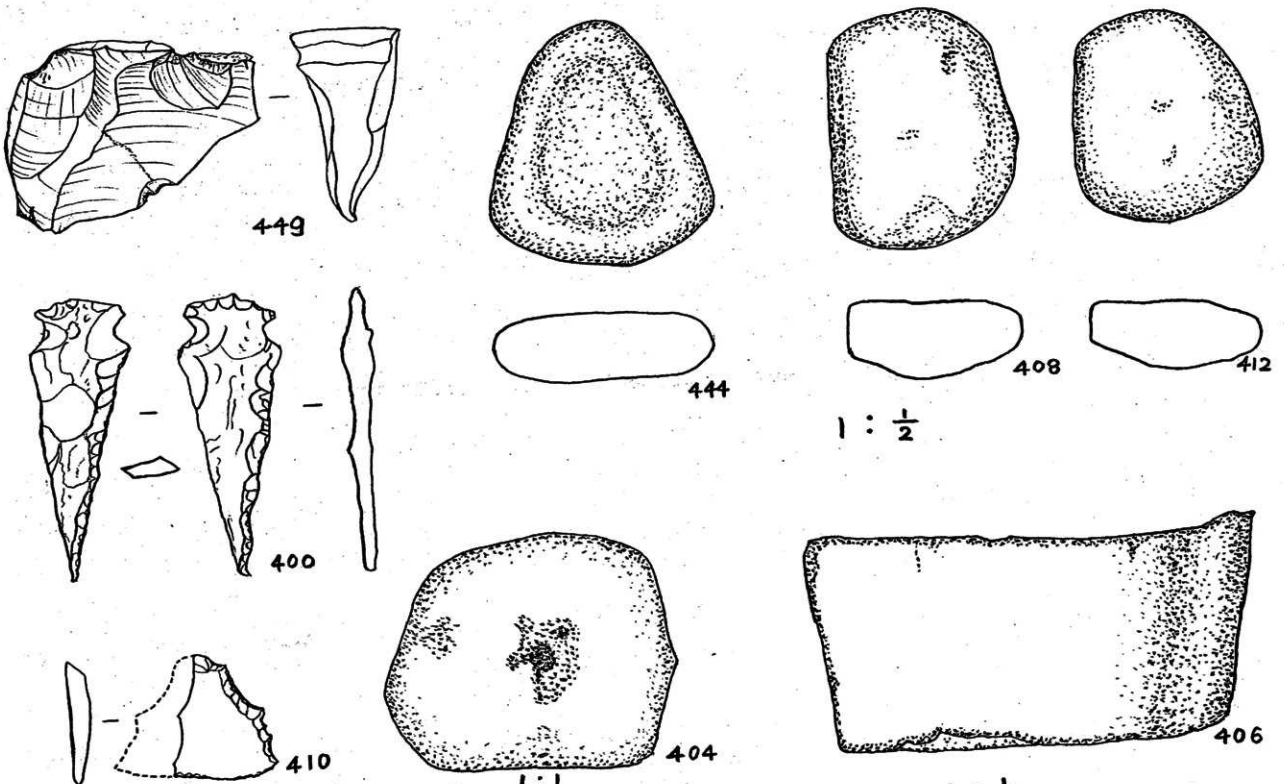
大樹の例状況

断層

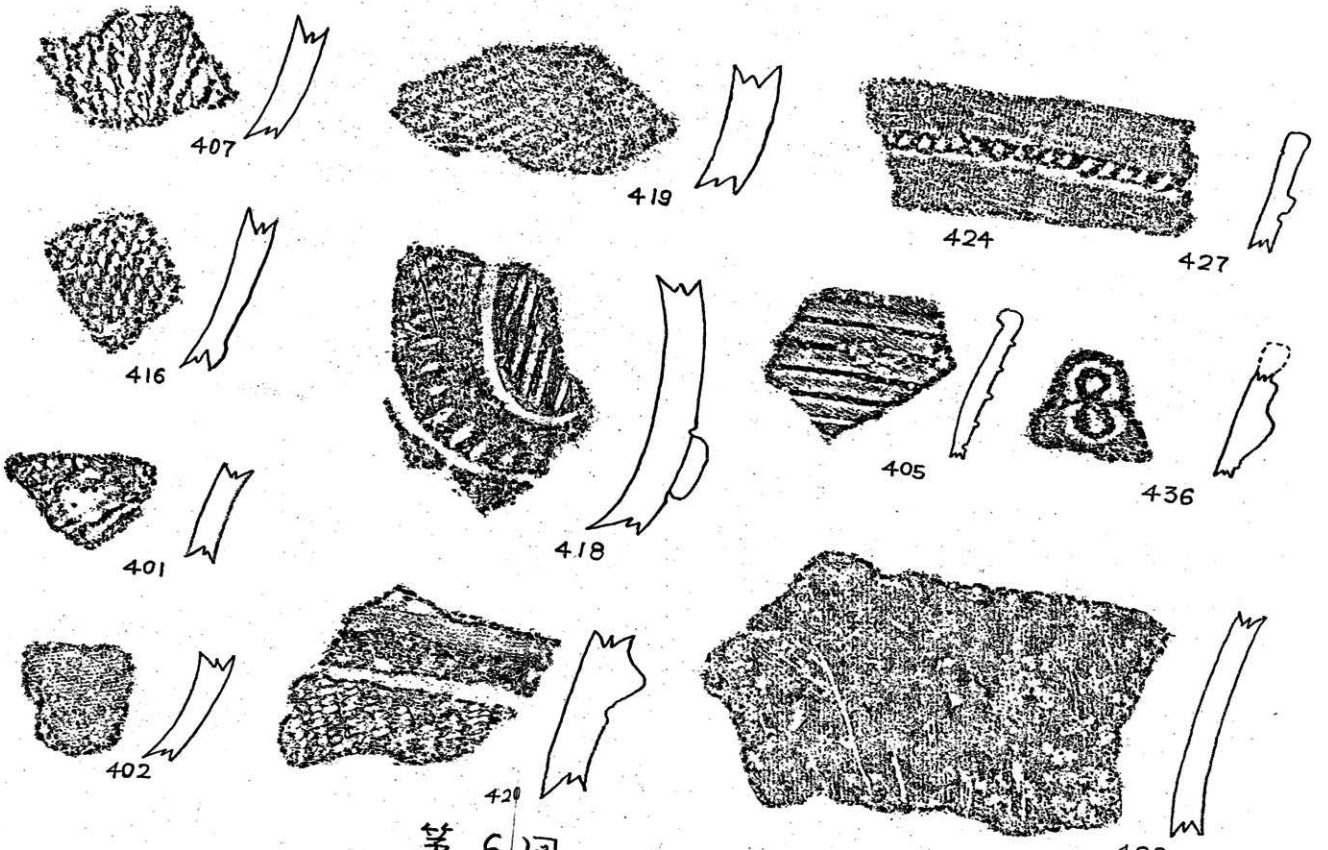
No1. ローム マウンド

図4

遺構と発掘風景



第5図 石器実測図



第6図　土器拓本

第1表　遺物台帳

番号	遺物名	摘要	番号	遺物名	摘要
400	石槍(縄期)粗質頁岩	褐色土層	425	土器片(縄期)堀内II	黒ノ層
401	土器片(早期)撚糸文	黒ノ層	426	〃　〃	〃
402	土器片(早期)無文	S.R上面	427	〃　〃	〃
403	土器片(早期)無文	S.R上面	428	〃　〃	〃
404	凹石(縄期)	S.R上面	429	〃　〃	〃
405	土器片(早期)無文	黒ノ層	430	〃　〃	〃
406	平坂牧石臼(縄期)	S.R上面	431	〃　〃	〃
407	土器片(早期)撚糸文	S.R上面	432	〃　〃	〃
408	磨石(縄期)	黒ノ層	433	〃　〃	〃
409	剥片(緑色岩)	S.R上面	434	〃　〃	〃
410	不定形石器(早期)(珪質頁岩)	S.R上面	435	〃　〃	〃
411	剥片(硬砂岩)	黒ノ層	436	〃　〃	〃
412	磨石(縄期)	黒ノ層	437	〃　〃	〃
413	土器片(縄期)堀内I	黒ノ層	438	石鏃(黒曜石)	S.R上面
414	原石(緑色岩)	黒ノ層	439	削器(黒曜石)	S.R上面
415	剥片(黒曜石)	〃	440	チップ(黒曜石)	S.R上面
416	土器片(撚糸文)(早期)	褐色土面	441	土器片(縄期)堀内II	黒ノ層
417	土器片(撚糸文)(早期)	RM黒	442	土器片(縄期)〃	遺物落込
418	土器片(中期)井戸I	S.R上面	443	土器片(口縁)(中期)割I	S.R上面
419	土器片(中期)井戸I	S.R上面	444	磨石(縄期)	遺物落込
420	土器片(中期)井戸I	S.R上面	445	剥片(緑泥片岩)	遺物落込
421	土器片(縄期)堀内II	黒ノ層	446	剥片(黒曜石)	RM黒
422	〃　〃	〃	447	剥片(緑泥片岩)	SR上面
423	〃　(縄期)堀内II	〃	448	剥片(硬砂岩)	SR上面
424	〃　〃	〃	449	石核(黒曜石)	表採

遺物番号は県教委調査分より引続き通番号とする。